

会報

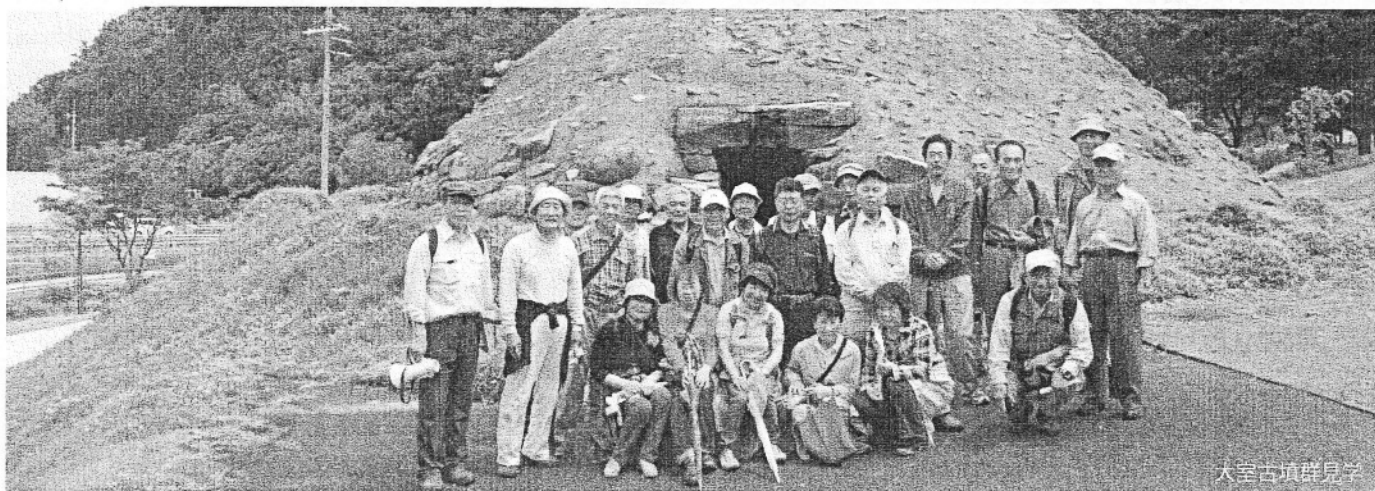
## 安曇人

安曇誕生の系譜を探る会

CONTENTS

- 1 安曇平の古代史への取り組みについて……会長 金井 恂
- 2 安曇族ゆかりの地全国交流会 in 高島  
全国交流会 in 高島と奈良の旅 参加者募集
- 3 「安曇族ゆかりの地全国交流会 in 高島」にむけて  
湖西の安曇人について……会長 金井 恂  
第8回通常総会開催
- 4 現地見学会雑考  
北信濃古墳と歴史博物館・歴史館探訪……小林 幹 胖  
編集後記……編修委員長 本郷 敏行

発行:安曇誕生の系譜を探る会 発行責任者:金井 恂 編集委員長:本郷 敏行 事務局長:浅川隆 〒399-8304 長野県安曇野市穂高柏原3612-3



大室古墳群見学

## 安曇平の古代史への取り組みについて

会長 金井 恂

私たちの会は発足してから7年になりました。7年という期間は短いようですが、これまでよく頑張ってきたと思います。会では安曇郡の設立のころの古代史に焦点をあてて勉強会を続けており、活動内容は年々充実してきています。また、外部の安曇族ゆかりの地との交流も続いています。これからもずっと長く続けていきたいと願っております。そのためにはこの会を、多くの会員が気楽に参加でき、そしてわくわくした気分になるような楽しい会とすることが大事です。私たちの会は市民サークルとして、門前の小僧つまり素人の集まりと考えております。学術研究の場とは違い、素人が自由に自分の考えを言い合うことができる会です。

会は活動を始めてからすでに長期間が経過しています。会本来のテーマである安曇郡の建郡の頃の歴史について、私たちなりの安曇の歴史の仮説を構築して行きたいと考えます。これまでに多くの先輩研究者たちがそれぞれに安曇の古代史について論じてきていますが、史料が少ないこともありあいまいな部分が多く残っています。また安曇平のなかで、穂高地域、豊科地域、堀金地域、三郷地域、明科地域ごとに開発の時代や発展の歴史は異なっています。その始まりはいつの時代か、どのようにして始まったのか、そしてこれらの地域はどのように関連し合って発展してきたのかなどははっきりさせるべき点が多々あります。また安曇平としては池田町地域、大町市地域、松川村地域の古代史も含めて考える必要があります。さらに隣接地域として松本平の古代史との比較検討も必要です。安曇の歴史は、これまで郷土史研究者たちによって地

域ごとに古代史が論じられ、町村誌の中に記載されてきました。またその後において新しい調査結果や研究成果も多数できています。安曇平全体の歴史としては、そうした個別的歴史を集大成して安曇平全体として一貫性のある歴史とすることが必要です。しかしこのことは、史料不足のために明確にし難いこと、そして研究者により歴史観の相違があるため一本化し難いことなどにより相当地に難しいことです。

するとこのテーマは、素人が怖いもの知らずに切り込むための適当なテーマだと言えます。そしてこのような取り組みは、安曇平の古代史を明らかにするための有効な手法だと考えられます。私たちが安曇の歴史を構築したとしても、それは素人集団の仕事ですから当然に仮説的なものにすぎないと考えられますが、しかしこれまでの学術研究の成果を集約したものと成すことは可能です。ドンキホーテのようにではなく、つまりあまり肩ひじ張らずに気楽に、町村誌や先輩研究者たちの論考そしてその後の調査結果などを勉強し、それらをまとめて安曇の歴史を語ると考えればよいのです。それは学会に発表するようなものではありませんから、先輩研究者たちのご了解を得られることと思います。そして何よりもまず、安曇の歴史は自分たちの郷土のルーツなのです。

私は7年目に入った今、勉強会の成果をこのようにところで設定し取り組んで行きたいと考えています。皆さんからご意見をいただきそしてご賛同を得ながら、取り組みを具体化して行きたいと考えています。皆さんの積極的なご参加をお願いします。

安曇族ゆかりの地全国交流会の開催が決定しました。

# 『安曇族ゆかりの地全国交流会in高島』

安曇族ゆかりの地全国交流会は、滋賀県高島市安曇川町で開催が決定しました。

主催：高島市あづみ族勉強会(旧あど安曇研究会)

## 『安曇族ゆかりの地全国交流会in高島』実施概要

**目的：**高島の歴史を学び地元の理解と愛着を育むとともに、地元の歴史や文化への関心を高め、高島を全国に発信する。また、安曇族を研究している各団体と交流を深めながら、それぞれの地域に残る文献資料や考古資料など貴重な情報の共有を図るとともに各団体が連携して学習が行えるきっかけとする。

**開催日時：**1日目/平成26年10月24日(金)13:30～・2日目/平成26年10月25日(土)8:30～

**会場：**安曇川公民館 視聴覚室  
〒520-1217 滋賀県高島市安曇川町田中 89 番地 連絡先 0740-32-0003

**主催：**高島市あづみ族勉強会

**後援：**高島市(予定)・高島市教育委員会(予定)

**参加費：**1,000円(※懇親会費および2日目の昼食代、入場料・拝観料は別途。)

**日程：**1日目(10月24日) 受付 13:30

勉強会①14:10～15:40

テーマ「高島の古代を考えるー発掘成果と文献からー」

講師 白井忠雄氏(高島歴史民族資料館 学芸員)

勉強会②15:50～17:00

テーマ「安曇族ゆかりの地を探る」

講師 金井恂氏(安曇誕生の系譜を探る会 会長)

懇親会 18:00～(2時間程度)

会費 2,000円

2日目(10月25日) 集合 8:15

現地学習(市内の史跡散策) 8:30～11:30(移動：マイクロバス)

講師 白井忠雄氏(高島歴史民族資料館 学芸員)

新旭地域から高島地域にかけて『上御殿、天神畑遺跡等、伝統産業(扇子等)』

昼食 11:30～

道の駅「藤樹の里あどがわ」(予定) 昼食代 1,000円

解散 12:50

## 「全国交流会in高島と大和万葉の里」を訪ねる旅 参加者募集

安曇誕生の系譜を探る会では、「安曇族ゆかりの地全国交流会in高島と大和万葉の里」を訪ねる旅の参加者を募集します。友人・知人・ご家族の皆さまお誘いの上ご参加くださいますようお願いいたします。

10月24日(金)	安曇野市 <small>7:00</small> ————— 安曇野IC <small>長野道・中央道</small> ————— 小牧JCT <small>名神・北陸道</small> ————— 木之本IC ————— ————— 高島市安曇川 <small>(昼食)</small> ————— 安曇川公民館 ————— 宿泊所(高島市安曇川)
10月25日(土)	宿泊所 ————— 安曇川公民館 ————— 安曇川 <small>(昼食)</small> <small>13:00</small> ————— 京都東IC ————— 美原北IC <small>15:00</small> ————— 榎原神宮 <small>16:00</small> ————— 16:10 宿泊所(榎原市)
10月26日(日)	宿泊所 <small>8:30 8:45</small> ————— 万葉の里見学(明日香村・桜井市立埋蔵文化財センター・奈良県立橿原考古学研究所附属博物館) <small>(昼食)</small> ————— 針IC <small>13:00</small> ————— 四日市JCT ————— 多治見JCT ————— 安曇野IC ————— 安曇野市 <small>18:30</small>

### ◆お1人の旅行代金(2泊3日)[算出人員10名]

交通費[貸切バス(中型27名)]	…… 38,000円
宿泊料	…… 21,600円
食事・弁当代[夕食1食・弁当3食]	…… 9,180円
諸費用	…… 1,790円
<b>合計</b>	<b>…… 70,570円</b>

### ◆申し込み:下記いずれかの事務局にFax又はメールでお願いします。【締め切り/9月23日(火・祝)】

事務局長:浅川 隆 〒399-8304安曇野市穂高柏原3612-3  
Tel&Fax:0263-82-4056 e-mail:asakawa.takasi@lapis.plala.or.jp  
事務局次長:松尾 宏 〒399-8204安曇野市豊科高家5412-1-1  
Tel&Fax:0263-72-4314 メール:matsuo-h@cello.ocn.ne.jp  
事務局次長:平林厚美 〒399-8302 長野県安曇野市穂高北穂高2297番地  
Tel&Fax:0263-82-3044 メール:heetrade@cocoa.plala.or.jp

※上記旅行代金は10名参加で試算しています。貸切中型バスは27名乗車出来ず、参加者が増えれば旅行代金がお安くなります。大勢の皆さまにご参加いただきますようお願いいたします。会員以外の友人・知人・ご家族の方々も大歓迎です。



## 「安曇族ゆかりの地全国交流会in高島」にむけて 湖西の安曇人について

金井 恂

滋賀県高島市安曇川(あどがわと発音する)町は、琵琶湖の西側に位置し、比良山系と琵琶湖に挟まれた場所にある。この地は古来より京都・奈良の都と北陸・若狭湾を結ぶ交通の要衝として栄えてきた。

湖西の安曇川町の北側は湖北と呼ばれている。和名類聚抄によると、湖北地域にはかつて伊香郡安曇郷があったことが記載されている。ここには安曇橋と刻まれた石柱が残っている(現在長浜市高月町阿閉(あつじ)地区)。地元の人は「あどぼし」と呼んでいる。湖北地域は戦国時代に激しい戦闘が何度もあり、古くからの家屋敷・寺院などはすべて焼けてしまい、古文書等は何も残っていない。安曇川町史によると、安曇川上流の上古賀地域で弥生時代から古墳時代にかけて遺跡が発見されている。そこで土錘(どすい)が出土している。この土錘は弥生時代に使用された漁撈用具の部品(オモリ)と考えられ、海人族がこの地域に定着していた証であるとしている。そしてこの地域は、安曇族が日本海側から進出してきたときの源郷(ルーツ)ではないかと記述している。彼らはその後安曇川下流へ進出し、安曇川地域へ移動したとのことである。安曇族が安曇川地域へ進出してきた時代は3世紀以前であると推測している。また安曇川周辺の古墳のうち安曇川の南側にある古墳群は継体天皇(507~531年)の出身氏族三尾氏のものと考えられるが、北側の饗庭野(あいはの)丘陵にある熊野本古墳群は安曇氏のものであった可能性が高いとのことである。

司馬遼太郎が街道をゆくシリーズ「湖西の道」の「湖西の安曇人(あづみびと)」で安曇族について少し触れている。しかし氏は安曇族=海人族という思い込みを持っており、安曇族のことを「どうも容貌がひねこびて背がひくく、一方、長身で半島を経由してきた連中にくらべ一目みてもなり姿がちがったようにおもえる」と書いている。さらに「この琵琶湖の西岸にやってきた安曇族は、なんとも怪しげで、ひよっとするとほうぼうの海岸の同族と大げんかして、ついに内陸へのぼり、やっとこの湖をみつつけてしぶしぶながら住みついたひねくれ者ぞろいだったかもしれず」と書いている。氏の安曇族についての認識について、私はかなり強い違和感を覚えるが、古代において湖西地方

で安曇族が定着していたということには異論ない。湖西に限らず湖北地方にも広がって定着していたと思われる。

この地域では、安曇の読みは「あど」である。町誌によると、音韻論的にはイズミは泉であり、井水とも表記する。これは水の出るところという意味であり、井戸と同じである。つまり井水(イズミ)は井戸(イド)と同じであり、結局ズミとドは同じであり、その結果「あど」と発音されたと説明している。しかし、この説明は後から無理矢理つけた説明のように思え、実際はもっと深い事情が隠されているように思う。それはつぎのようなことから推察できる。

万葉集に安曇川に関する歌がいくつも載っているが、「安曇」と表記されずに、「阿戸」、「阿渡」、「足速」、「足利」、「吾跡」と表記されている。記紀には阿曇と表記されているにも拘わらずである。これは故意に「安曇」、「阿曇」を抹殺した結果のように思えるのである。

また安曇川町には、蒲生の薬師という安曇氏の氏寺があるとのことであるが、一方綿津見命を祀る神社はない。なぜなのか、不思議なことである。

さらに町誌では、この地の安曇族は古い時代、継体天皇の時代よりも古くに三尾氏に征服され、さらにその後大和方面に強制移住させられたのではないかと推測している。すると安曇川町地域では、古代において壮絶な争いがあり、安曇族は抹殺されたことになる。その際地名まで抹殺されたのではないだろうか。地名まで抹殺するような憎しみを伴った争いとはどんなものだったのか。

こうして見ると安曇川町地域には安曇族の大きな悲劇が隠されているように思える。

安曇川町地域は琵琶湖の畔にあるとはいえ、海とは縁のない内陸地域である。なぜ、海人族と言われる安曇族が進出してきたのだろうか。それは長野県安曇野市の場合と同様の謎である。ただし、安曇川町から背後の山を一つ越えればそこは日本海であり、弥生人が九州から進出して来て定着していた地域である。そこから進出してきたと思えるが、今のところ明確ではない。

安曇川町地域には安曇族に関する深い謎とロマンが眠っている。今後の調査研究が期待される。

### 第8回通常総会開催

第8回通常総会が去る5月10日(土)穂高神社参集殿で行われました。全議案が原案通り承認され新年度がスタートしました。役員改選の時期に当たりましたが2氏交代のほかは全員留任となりました。尚、事務局は次長2名

体制となりました。次長は松尾宏さん、平林厚美さん、新任幹事は倉科武久さん、川崎克之さんです。

総会終了後市教委山下泰永さんの穂高古墳群について講演がありました。

## 現地見学会雑考

## 北信濃古墳と長野市立博物館・長野県立歴史館探訪

小林 幹 胖

6月7日北信方面へ現地見学会を行いました。立案から実行まで人脈や職業上の知見、P・C、写真等多くの方々のお力を結集して実施できました。当日は、参加者全員のご協力によりスムーズに全行程を終了しました。(毛虫の猛攻を受けカサが必要な程でしたが…)

## 1. 大室古墳群について

- (1) 築造時期：5世紀中頃～8世紀前半とされている。
- (2) 特徴：積石塚古墳、241基中176基が積石、27基が合掌形石室である(以上史料より)。入口の方向がアトランダムである(穂高古墳群は概ね南または南東である)。
- (3) 進化と分布：山の麓から上へ上へと時代とともに分布し粗から密へとなっているようである。現地の山石を多く使用しており、小規模なものが多いようである。
- (4) 起源：様々な説があるが、朝鮮半島説、馬具等、牧としての見地から大陸からの渡来人説等があるが確定的ではない。
- (5) 安曇との直接の関係は見出せなかった。

## 2. 森將軍塚古墳について

- (1) 規模：全長約100米の前方後円墳であり竪穴式石室は日本最大級といわれている。
- (2) 築造時期：4世紀後半と言われている。

(3) 山の尾根を利用して造られており、地形上中心線が平野に向かって左に片寄っている。

(4) 時の権力者(王)が生前より築造したものと思われる(現地ボランティアの説明)。権力の象徴として死後も被権者から仰ぎ見られる必要があった(松木武彦説)。

(5) 近くには3基程前方後円墳があるが安曇近辺では松本市弘法山古墳(前方後方墳)以外このような巨大な古墳はないので直接的な交流はなかったか？それとも5世紀頃にはこのような前方後円墳を造らせる権力者はいなかった？

## 3. 長野市立博物館及び長野県立歴史館について

歴史を学ぶ者として乏しい知識から見ても大変貴重な文物を見学させていただきました。

- (1) 箱清水式土器、朱の鮮やかさや有明古墳群から出土した金銅製の飾り金具の説明が印象的だった。
  - (2) 県立歴史館では福島さん(会員)のご好意によりバックヤード(整理研究保存場)を見学出来、大変良い経験だった。
  - (3) 安曇野市も旧五ヶ町村が独自に保有している歴史的資料を整理統合した博物館の建設が必要と思われる。
- 以上、私見を述べましたが、お気づきの点がありましたらご教示くだされば幸いです。

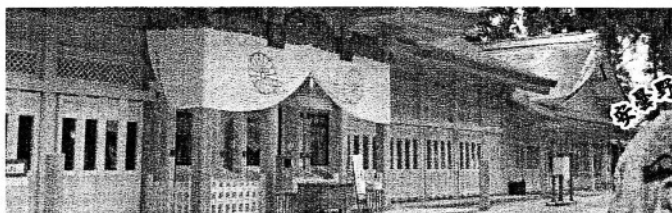
## 編集後記

サッカーのW杯が終わった。世界中が熱狂したとされるが、それどころではない人達がいたことも事実だ。今回はサッカーが格闘技であることを実感した。個の力がなければチームの力ともなり得ない。技術論、戦術論は専門家に譲るとしてここでは報道のあり方に対して大いに異議を唱えたい。事前の報道では勝利への期待感一色、特にテレビではサッカー芸人(元プロ有名選手)によるお祭り騒ぎだけが目立った。彼らは井の中の蛙だったのか。世界のサッカー界の流れ、進歩が

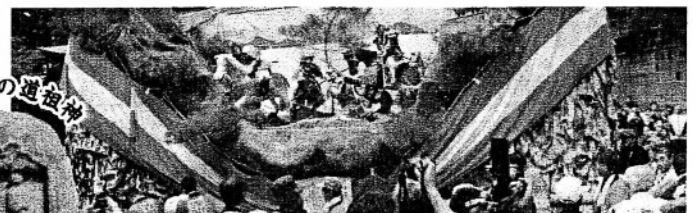
つかめていなかったのか、強い怒りを覚える。あるいはメディアの方針によって踊らされていただけなのかこのような報道のあり方は第二次大戦前の戦意高揚一色のあの忌まわしい報道に回帰したのではと思わせる(思いすぎならよいが)。

今、我々は秘密保護法、憲法解釈変更等重大な局面に立たされている。メディアの責任は重大である。国民の知る権利を守ること一人類史上普遍的鉄則であることは言をまたない。

(本郷)



安曇之祖神 穂高神社

安曇野市穂高6079 電話 0263-82-2003 <http://www.hotakajinja.com>

穂高人形飾物と道祖神展

資料館 御船会館

電話 0263-82-7310



安曇誕生の系譜を探る会

会報発行：平成25年9月

事務局：〒399-8304 長野県安曇野市穂高柏原3612-3 事務局長 浅川 隆  
Tel.0263-82-4056 E-mail: asakawa.takasi@lapis.plala.or.jp